

液細胞診で class V 腺癌を得たことから、粘液産生膵癌と診断し、膵全摘術施行。病理組織学的には、膵体部に 40×22mm の石灰化を伴う粘液癌を認めた。術後 2 ヶ月の現在生存中。特徴的な乳頭所見を呈するこの型の膵癌の早期発見のため、通常の上部消化管内視鏡検査でも、主乳頭の観察が重要と考えられる。

9. 膵頭十二指腸切除が有効であった慢性膵炎で早期胃癌を併発していた 1 例

興梠 建郎・小林 貞雄 (水原郷病院外科)
 小黒 仁・斉藤 徹
 関根 正俊・鈴木 康稔 (同 内科)
 寺田 一郎
 高木健太郎 (新潟大学第一外科)

約 40 年間、1 日に 2 合 (180ml) 位から最近の 5 年間では、900ml~1800ml の清酒を常飲していた男性で、慢性アルコール性膵炎と 5 年前に診断され、治療開始したが断酒できず、急性増悪を繰り返し、最近では上腹部激痛発作、体重減少、急性アルコール中毒、肝障害を呈すようになり、糖尿病、高血圧症を併発し入退院を繰り返していた患者に、膵頭十二指腸切除術を施行し、愁訴の消失と糖尿病の好転をみた 1 例を報告する。

術前検査で胃体部に IIc 早期癌を発見、又 CT、腹部超音波検査、ERCP 等で膵頭部石灰沈着、膵嚢胞形成、拡張した膵管内の結石、下部総胆管狭窄、多発性二次膵管嚢状拡張等が確認された。術前検査では、CEA、CA-19-9、尿中アミラーゼ、血清アミラーゼ、ACCR、トリプシン、エラスターゼ 1、 γ -GTP Al-P、等の上昇と PFD テストの低下がみられた。

膵頭十二指腸切除時に胃リンパ節郭清と、膵管内結石の胆道内視鏡を用いた除去が行なわれた。術後の検査では上記検査の正常化と 75gr 糖負荷試験、1 日血糖曲線 PFD テスト、ACCR 等で膵内分泌機能、及び膵内分泌機能の両者の好転がみられた。術後 1 年の現在症状全く消失、体重増加がみられ、断酒にも成行、快適な日常生活を送っている。

10. アルコール性膵炎 32 例の検討

羽賀 正人・安達 哲夫 (下越病院 内科)
 山川 良一
 清水マチ子 (舟江病院 内科)

近年アルコール消費量の増加に伴い、アルコールに起因する臓器障害、代謝異常は日常臨床上市しばしば遭遇する病態となってきた。我々は過去 5 年間にアルコール依存症 120 例を経験し、そのうち膵炎と診断された 32 例について臨床像を中心に検討した。症例は男性 29 例、

女性 3 例で 50 歳代の男性が 9 例と最も多かった。問題飲酒開始から症状発現までは 7 年から 20 年まで平均 11.8 年で平均発症年齢は 38.5 歳であった。画像診断では ERCP を 18 例に施行し、石灰化例 8 例、主膵管閉塞 3 例、偽嚢胞 3 例が認められた。また石灰化群に体重減少傾向が認められた。糖尿病は膵炎と密接な関係にあり、11 例 (34.3%) が薬物療法を要した。そしてアルコール依存症 120 例中、膵炎群は非膵炎群に比して肝機能障害 (肝胆道系酵素、ICG) が軽度であった。(p < 0.05) 臓器のアルコール感受性についてさらなる検討が必要と思われた。

11. 胃体部接吻潰瘍の一方が早期癌であった 2 例

浦田 昇・佐々木良文
 山田 八郎・岩田 文英 (佐渡総合病院)
 田尻 正記・本田 康征
 瀬川 宗助・藤野 正義

胃癌と胃潰瘍が同一胃内に独立して存在することは比較的まれとされているが、その中でも接吻潰瘍の一方が癌である例はきわめてまれなものとされている。今回我々は胃体部接吻潰瘍の一方が早期癌であった例を 2 例経験した。第 1 例は内視鏡的に一方が悪性であることを疑われ、生検により癌が発見された。第 2 例は当初接吻潰瘍のいずれもが形態的に良性と診断され、治療をうけていたが、潰瘍の経過観察の過程で一方が悪性を疑われ、生検により癌が発見された。

接吻潰瘍の一方が早期癌であった従来の報告例によると、癌の組織型は低分化型腺癌で IIc + III 型をとるものが多いとされているが、本症例はこれとよく一致していた。

接吻潰瘍においてもきわめてまれではあるが、一方が早期癌の例があり、注意深い検索が必要であることを示した。

12. 胃の hyperplastic polyp の一部に癌を認めた 2 例

七條 公利・有田 徹
 柳沢 善計・角谷 宏 (立川総合病院 内科)
 月城 孝志・味方 正俊
 渡辺 裕・村山 久夫

症例 1 は 58 才男性。20×18mm の亜有茎性ポリープで表面はやや分葉状を呈し、発赤調であった。症例 2 は 73 才女性。13×10mm の有茎性ポリープで、表面は比較的平滑で発赤調であった。いずれも内視鏡的には、明らかな悪性所見を認めなかったが、組織診にて、頭部表層の一部に高分化型腺癌が証明された。

本症例のごとく、いわゆる中村 I 型に属する過形成性ポリープの癌化率は、中村らの報告によれば0.6%前後と極めてまれである。今回提示した2例は、いずれも内視鏡的には良性ポリープと考えられたが、完全生検により、癌が証明され、ポリペクトミーの診断的治療の意義が大きかった。ポリペクトミーの適応については議論も多いが、やはり完全生検の意味で、可能な限り行なうべきと考える。

13. シスプラチン療法が有効であった癌性腹膜炎を伴う進行胃癌の1例

鈴木 正和・相川 啓子 (田代消化器科病)
山本 賢・田代 成元 (院内科)

症例は50才男性。昭和60年5月初旬より続く腹部膨満感、食思不振に乏尿傾向が加わり6月21日入院した。入院後の精査で、原発巣は胃体上部大彎を中心とし、胃体下部まで浸潤する Borrmann IV型胃癌であり、癌性腹膜炎による腹水と腹壁転移を伴う stage IV の進行胃癌と診断した。全身的化学療法として、シスプラチン25mg/日5日間連続投与を4週間隔で2クール行ない、MMC 4mg/日、5FU 250mg/日同時静注を1~2回/週を計25回併用した。原発巣は1/2以下に縮小、腹水と腹壁腫隆は消失、CEA は3236mg/mlから6.7mg/mlへと低下し、partial response の結果を得た。シスプラチンは泌尿器、婦人科領域の進行癌に対する有効性は多く報告されているが、今回我々は進行胃癌に対して用い、有効であったので報告する。

14. 長期間を経過した胃リンパ腫が疑われる1例

中村 宏志・関根 厚雄 (県立吉田病院内科)

約6年の長期間を経過した胃悪性リンパ腫が疑われる症例を経験したので報告する。症例は74才の女性。52年に難治性胃潰瘍で当院入院。60年3月初旬より心窩部痛出現、胃内視鏡、X線検査で悪性潰瘍を疑われ、手術するも、根治性なしとしてリンパ節生検のみ施行。生検標本からは、リンパ腫も考えられるが反応性のものも否定できず、CHOP 及び COP 療法で内視鏡、X線所見の改善をみた。52年には内視鏡像で粘膜の変化はみられないが、54年には、皺襞の肥厚像がみられ、リンパ腫を疑わせる所見で、6年前に発症していたことが強く疑われた。本症例が RLH ではなく、悪性リンパ腫であろうと考えた根拠は、経過を追跡しても内視鏡所見が改善しないこと、腫瘤形成が病変の主体であること、漿膜に浸潤があること、の3つである。

15. 十二指腸平滑筋肉腫の1例

島田 久基・川村 正 (長岡赤十字病院)
佐藤 俊郎・遠藤 次彦 (内科)
石川 忍
和田 寛治・小林 清男 (同 外科)
神谷岳太郎
金子 博 (同 病理)

十二指腸球部の平滑筋肉腫の一例を報告する。症例56才、男性。主訴 右上腹部不快感、動悸息切れ。S 60.9月頃より右上腹部不快感、動悸息切れが出現。検診の胃X線異常と貧血のため、12月2日当科で内視鏡を施行、十二指腸球部に潰瘍を伴う腫瘤を発見されて入院した。身体所見では、貧血があり、腹部腫瘤は触知しなかった。検査上、貧血、便潜血陽性と CEA, Elastase I の軽度上昇を認めた。低緊張性十二指腸造影で球部に腫瘍と潰瘍を認め、CT では十二指腸と接して、よく enhance され中央に low を伴った腫瘤があった。腹腔動脈造影で胃十二指腸動脈より栄養される hypervascular な腫瘤あり。内視鏡下生検では平滑筋肉腫が疑われた。12月20日、臍頭十二指腸切除施行。十二指腸球部後壁に、潰瘍を伴う8×8×6.5cmの腫瘍があり、主に壁外性に発育していた。光顕・電顕による検索で平滑筋肉腫と診断された。

16. 小腸腫瘍症例の検討

加藤 俊幸・高田 洋孝 (県立ガンセンタ)
斉藤 征史・丹羽 正之 (一新潟病院内科)
小越 和栄
鈴木 正武・角田 弘 (同 病理)

過去10年間の小腸悪性腫瘍は10例で、癌5例、平滑筋肉腫3例、悪性リンパ腫2例であった。部位は癌5例中3例は空腸、2例は回腸で、肉腫は3例とも空腸、悪性リンパ腫は2例とも回腸であった。平均年齢は53.3才、男女比は7:3であった。症状は腹痛70%、腫瘤60%、嘔吐と食欲不振50%で、とくに肉腫は腹痛と腫瘤を、リンパ腫では便秘と発熱を訴えた。病脳期間は平均8.6カ月と長く1年以上の症例もあり、多くは上・下部消化管検査の後に長く対症療法が行われていた。また貧血を50%、赤沈値亢進を87.5%、便潜血陽性を85.7%に認めた。診断は小腸造影や血管造影が有用であったが、近年USで4例中3例、CTで5例全例に腫瘤像を認めた。さらに小腸内視鏡で3例が、大腸内視鏡で2例が病変の観察と直視下生検が行われた。